2023 年 9 月 15 日

朝日カルチャーセンター講座　～北九州市藍の島 ～

小倉港フェリ―に乗船すると、約 40 分弱で藍の島に到着する。福岡市沖の相の島とならんで猫の島として有名らしい。

古来、朝鮮半島をめぐる複雑な情勢なかで、重要な役割を担わされてきたのが藍の島である。古代の大和朝廷の日本防衛前線基地としての役割から、江戸時代に農民が小笠原の許可をえて開拓に入るまでの約 1000 年間は、無人島のままであった。

現在約 160 名余の島民が住んでいる。 唯一の食料品店の前にヒトツバタゴが植わっていた。店のご主人が故郷の対馬から結婚の折に持ち帰ったということであった。

藍の島漁港から島の先端の千畳敷まで、約 2 キロメートルの一本道である。千畳敷は 3000 万年前の地層、化石海岸線が露出している貴重な場所であるという。 実際に岩盤上になった砂浜や、貝の化石が見られる露頭を観察しているとタイムスリップしたような気もする。植物ダンチク、クズ、ヤダケ群生、テイカカズラやツルウメモドキ、サネカズラが低木に覆いかぶさっている様子は、小さい島の閉鎖空間？を感じらせられた。高木はタブノキ、イボタノキ、が目立っていた。ホシアサガオ、ホソバワダン、オオバグミ、ハマビワ、ツルナ、オカヒジキ、などの海浜性のものも。船の都合で観察時間が短くて残念だったが、千畳敷という 3000 万年前の地層に出会えたのは今日の収穫だった。参加者の話によると、先回の夏井が浜一帯もここと同じ芦屋層群であったということだ。特に千畳敷は、2500～3000 万年前くらいに日本が大陸から離れていく過程を示す地層として大変に重要だということだ。

島のあちこちに、子どもの書いた案内板が立っており、この小さいけれど魅力的な島を愛する気持ちが伝わってきた。（参加者 19 名、野見山、薛）